

特集

【実践】地域で豊かに学ぶ―教育・福祉・労働・地域との連携―

障害のある子どもたちが 地域を再生させる

岡山県倉敷市立東中学校教諭 西 幸代

一 ふれジョブってなあに

ふれジョブは二〇〇三年に一つの中学校区からはじまった課外活動である。障害のある子どもたちが学校卒業後、自分の生まれた地域で、地域の構成メンバーとして大切にされて生きていけるようになるためには地域の人に理解していただく必要がある。地域で職場体験をするという手段でその基盤づくりをする活動である。小五くらいから高三くらいの障害のある子どもたちがジョブサポーターとよぶ地域住民に付き添われ活動する。一週間一回一時間六か月間、地域の企業で活動する。付き添いや保険あり・雇用なし条件などで障害者にかかわったこと

ない企業の参加を容易にしている。一度受け入れてみれば接触経験の不足が差別観を生んできたことに気づき、不安をもって受け入れを決めた企業は日がたつごとに好意的になり、子どもへの工夫を始める。一〇年間続けられれば、子どもたちが自然に企業の理解を促すようになる。長く続けるにはかかるコストが大切であるが関係者に掛ける保険くらいの活動資金でできる（二一年度はかかる全員にかかる保険代二万円弱）。地域住民は地域の子どもの地域で育てることと地域の連帯感を取り戻し、人の役に立つことができると幸福感を味わう。学校も課外活動なので負担は小さく卒業後も子どもたちを見守る人たちにつなぐことで長期間計画

ふれジョブ
の流れ例

● 中学校放課後



的に接触経験を蓄積していくことができる。利益でつながらないこうした社会資本こそが生涯にわたって子どもたちを守ることになる。

二 体験する(い)

1 子どもの体験

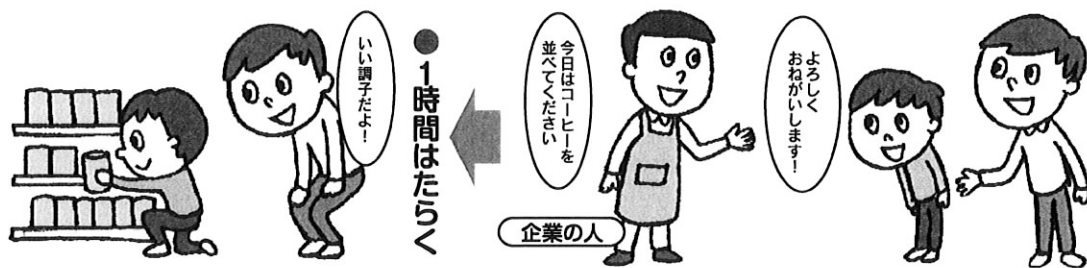
子どもは学校の授業数の少ない曜日や土日に下図のような手順で活動する。一週間一回一時間を繰り返すことで職場の人たちと知り合い、仕事の入り口を学び、職場の文化に触れていく。本物の場と人の中で、あいさつの大切さを知り、時間を守るこの意味が浸みてくる。達成できる仕事を本物の職場でこなして自信がつくと我慢もできるようになる。本物に緊張してちよつと背伸びをしてがんばる子どもの姿を企業の方がまちどおしく思えるようになるころ、子どもは次の職場に移動する。小さなお別れを六か月ごとに繰り返して、小五から高三まで続けると地域に知り合いはどれくらいに増えるだろう。社長さんや会社の方とまじり合ったとき、ぼくは社長さんたちと友達なんだと気づく景色が地域にある学区

が生まれてきた。

2 保護者の体験

保護者は職場体験中、ジョブサポーターさんと企業の方々に子どもを完全に委ねなければならぬ。「迷惑をかけないかなあ」そんな不安と闘って家で待つ。六か月たてば次の子のために慣れた職場を渡さなければならぬ。小さな我慢の積み重ねがいつも必要だ。障害のある子どもたちは「人を協力させていく力」を持つていることに保護者は気づかないことが多い。だから、「大丈夫だよ」と心を抱きしめたあと背中を押してくれる地域の人や教師が必要だ。保護者は次第に定例会でわが子の力を信じるようになる。そうなる子どもに向いていないと思っていた仕事にも子どもを送り出せるようになる。保護者の当初の予想はたいへい覆る。「子どもの力を信じること」「そのまま大切な存在として学齢期から社会に出すこと」これができるかどうかは子どもに障害があるうがなかるうが親ならばみな試されることである。

3 ジョブサポーターと企業の体験



特集 【実践】

地域で豊かに学ぶ—教育・福祉・労働・地域との連携—

障害についての特別の学びをしていた
だかないことにしている。保護者との面
接で子どもの話をしっかりと聞いていた
ことができれば大丈夫である。私たち
が関心のあるのは人であるから、その地域
に生きる仲間として、子どもたちがどう
参加していくかを話し合い、工夫し合う
だけである。

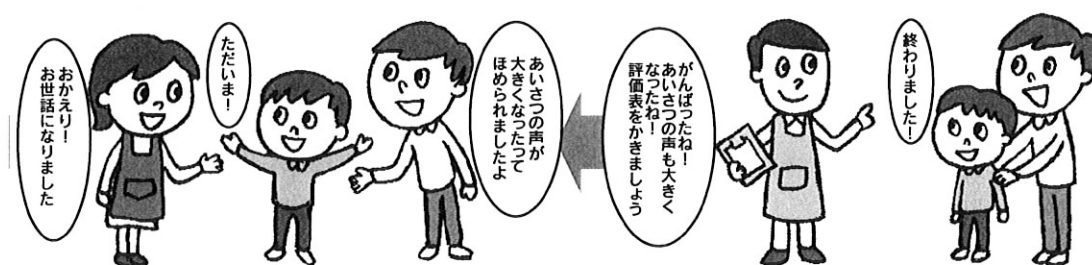
できることに徹底的に目を向けて子ど
もたちに向き合う人々である。障害ある
子どもたちの育ちを共有するとジョブサ
ポーターも企業もずっとかわりたくな
るが「子どもが育つのは何が一番よい
か」考えると、体験を増やすために子ど
もを手放さなくてはならない。保護者と
同じくかわるものはみな小さな我慢が
必要になる。それくらい障害のある子ど
もたちは地域で魅力的である。

三 定例会で共有する

中学校区ごとに月一回地域の公民館で
体験したことを持ち寄って話す集まりを
開いている。障害のある子どもの体験・
企業の体験・ジョブサポーターの体験・
保護者の思い・学校の体験・これから始
めたいと思っている人の気持ちなどな

ど。一人一人の体験を参加者全員で共有
することがとても大切なのだ。地域の人
が「ジョブ」を柱にして一か月に一回集
う。口の字型にした机を囲んで楽しんで
いる。サポーターと企業の席の向かいの
席は保護者と子ども席。サポーターと企
業は代わるがわるに子どもたちが月
間、頑張ったことを子どもに向けて生の
言葉で話してくれる。ある人は「きみの
言葉で話してくれる。ある人は「きみの
おかげでこんなことに気付かせてもらっ
たよ」と感謝の言葉を子どもに添える。
ある人は「おかげで役に立つ喜びを感じ
ているよ」と感謝する。それらの子ども
に降りかかることばのおこぼれは横に座
る保護者にも注がれる。会を重ねるごと
に保護者は地域に居場所を見つけたい
く。子どもに希望と夢を見つけないが、
保護者自身が少し遠慮していた地域住民
として近い距離を取り戻し、根の張った
所属感を持つようになる。人の成長を
自分のことのように喜びあえる仲間がす
ぐそばに住んでいることは心地よいこと
である。ジョブサポーター宮原公恵さん
のエッセーの一部を載せる。

『ぶれジョブをとおして何がしたいか
は明確である。自分の住んでいるこのま



ちで生涯生き生きと楽しく暮らすこと、ただそれだけである。たったそれだけが案外難しいのであるがみんなが少しずつ力を出し合うことでそれが実現することをこの活動は実感させてくれる。子どもたちは働く喜びを知りサポーターは子どもの成長にかかわることができ、地域に素晴らしい企業があることも気づいた。「子どもたちやサポーターさんから学ぶことがいっぱいある」と言われる企業の方からまた学ぶ。「学校では学べない本物の経験を翌日子どもが話すことで成長の循環がおきている」と先生方から聞く。一緒になって子どもを育てる喜びを味わっている。かかわった者皆が幸せを感じる町ぐるみの活動になりつつある。 中略

人の幸せは実は本当はシンプルなもの、で出来る上がついていくものだと思う。誰かにうれしい言葉をかけてもらう・誰かにやさしい言葉をかけてあげられる・誰かが誰かに美しい言葉をかけているの聞く・それらがすべてこの会にはある。だからこそ人が集うのだと思う。…

雑誌『地域づくり』二〇〇九、三

四 地域市民になること

「自分に合った仕事に就くこと・自分の夢をかなえること・子どもの就職だけをめざすこと」に邁進して自己実現だけを生きる目的にすると苦しい。ぶれジョブが生きる喜びになるのはそれだけを目的にしないからである。月一回の会合に出て、週一時間を未来のために割くことを続けることは面倒なことである。かわる全員がそれぞれの生まれた地域で自分以外の誰かのためにちよつとしたわずらわしさをひきうけて小さな犠牲を持ち出してはじめて活動は成り立つ。面倒なことを一〇年間繰り返すという営みが地域市民になるということだ。

グローバルゼーションが進み境界のないITだけのバーチャル世界で生きていくと、ひとはますます自分の所属を失うだろう。ぶれジョブにかかわるとき、参加者は五感をめいっぱい使って身体活動のコミュニケーションをしている。障害のある子どもたちがリアルな地域社会を取り戻して皆が地域に各自のアイデンティティを取り戻すのに大切な役割を果たす力になると思う。



定例会の様子



特集 【実践】 地域で豊かに学ぶ—教育・福祉・労働・地域との連携—